

## 2000年度第3回コロキウムについて

著者	萩原 弘子
引用	女性学研究. 2001, 9, p.28-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/10069">http://hdl.handle.net/10466/10069</a>

### 2000年度第3回コロキウムについて

2000年度最後のコロキウムは、「地球規模の展望の枠組みとしてのフェミニズム国際主義を問いなおす」というテーマで、2001年3月4日にワシントン大学女性学学科のタニ・E・バーロウさんをお招きして行なった。このコロキウムは、バーロウさんがお茶の水女子大学ジェンダー研究センター客員教授として来日されている時期にあわせて企画したものである。

バーロウさんは、中国近現代史のご専門で、特に現代中国社会におけるジェンダー関係に強い関心をもって研究されてきた方だ。

本コロキウムの目的は、フェミニズム国際主義 (feminist internationalism) あるいは国際的フェミニズム (international feminism) とでも呼ぶべき、フェミニズム思想のなかの或るイデオロギー的態度の批判的再考である。北世界の女性学研究において、かつてのような中流階級白人女性の経験をしか見ない態度の限界は、いまや多くの人々が批判するようになった。世界のさまざまな女性の経験に言及してフェミニズム (ズ) を論じ、追究する書物は数多く刊行され、そこには南世界出身の論者による論考も含まれている。そうした書物にはさまざまなレベルや質があるだろうが、コロキウム企画者の関心は、日本も含めての北世界で主流となっているフェミニズムなり女性学研究が標榜ないしは展望する世界性あるいは国際性とは、本当のところどういうものだろうかということであった。その関心にしたがって、次のような3本の発表を行なった。

まずバーロウさんから約1時間にわたって「「国際的フェミニズム」について」という発表をしていただいた。これは後掲の論文をご覧いただければわかるように、「国際的フェミニズム」という名称の、ワシントン大学での演習科目についての一種の教育論であると同時に、「国際的フェミニズム」という思想的立場を論ずるものでもあった。バーロウさんは、学生たちが自明としている、国際主義に立つフェミニズムの根拠に疑いを投じ、国際主義が隠しもつアメリカ中心主義を知り、それと批判的に対峙していけるような知的訓練のありようを追究しておられる。internationalism と globalization の違いから始めて、女性身体への侵害・暴力を批判する人権フェミニズム論の問題、またいわゆる「ローカル・フェミニズム」といわ

れるものの「ローカル」概念の問題などについて、学生が内発的な問いをもつようにするにはどうしたらよいかといった諸点を丁寧に論じられた。発表後にいささかの質疑応答の時間もち、昼食休憩ののちに、兼任研究員である萩原と岡が発表を行なった。2人の発表は、バーロウさんの発表のなかでとりあげられている複数のフェミニズムのうちの1つである、人権フェミニズムに関するものであった。

以下に訳出掲載するのは、バーロウさんの発表のもとになった未刊行論文全文の前半である。後半は次号に掲載する。本誌はこれまで、その年度に実施したコロキウムの発表内容を論文化して掲載してきたので、こういうかたちでの論文掲載は例外的である。これはコロキウムの席上、この論文がアメリカのフェミニズム/女性学教育領域の学術研究誌数誌から拒否されたことを知っての決断である。コロキウムでは、時間の制約もあって、バーロウ論文中にあるエコフェミニズム論は省略されていた。また兼任研究員2人の発表は、女性学教育に関するものではなく、人権フェミニズム議論に関するものだった。したがって、発表に続く討論でも、エコフェミニズムはとりあげられなかったし、教育論よりは人権フェミニズムを中心とするフェミニズム国際主義の問題性に重点を置いたものとなった。コロキウム実施前は、コロキウム討論での重要論点にあわせて、バーロウ論文を編集して訳出する予定をしていた。しかし掲載拒否の事実を知り、またその理由として、この論考がアメリカにおけるフェミニズム主流陣営への批判を含むからであろうことが推測されると聞いて、それならば本誌が全文を掲載しようということになったのである。したがって2回に分載したところでやはりかなり長い論文に紙数が必要なため、萩原と岡の発表は論文化せず、討論のまとめのなかで報告するにとどめている。翻訳版とはいえ、本誌がバーロウ論文を全文掲載できるのは、光栄なことである。

コロキウムは発表から討論まですべてを英語で行ない、約20人が参加した。毎度のことだが、通訳をしていると討論の時間を十分にとれないので、今回も通訳なしで行なった。約6時間におよぶコロキウムで熱心に発表、討論してくださった、バーロウさんをはじめとする参加者の皆さんに心から感謝している。

(萩原弘子)